

1 審査員

- ・服部 浩之（インディペンデント・キュレーター／あいちトリエンナーレ 2016 国際展キュレーター）
- ・武藤 勇（N-mark 代表）
- ・滝 一之（滝一株式会社代表取締役）
- ・武藤 隆（長者町アートアニュアル副会長）

2 審査基準

滞在制作をとおして長者町地区の地域資源を活かすことのできるアーティストを募集し、審査基準については次のとおりとした。

(1) テーマの理解

長者町の地域資源を活動しているか、それにより相乗作用が起こりうる可能性を秘めているか

(2) 独創性

作品のオリジナリティがあるか

(3) 実現性

プランの計画性とその実現性が十分か

(4) 芸術性

作品としてのクオリティ、アーティストの今後の活動につながる将来性・発展性があるか

(5) 公共性

地域に関わることへの積極的な姿勢があるか、公共施設という場や空間の特性を考慮した提案か

3 審査員講評

服部 浩之氏（インディペンデント・キュレーター／あいちトリエンナーレ 2016 国際展キュレーター）

「黒田さんは、広島出身ということもあり、歴史の問題に意識的で、それを未来へと接続させていこうという意思を感じた。長者町や名古屋について事前に調べて掴んだ手がかりを、滞在制作を介して深め、新たな作品を生み出してもらえればと期待する。

川田さんは、壁画という手法がユニークで、作品のクオリティもとても高い。ただ、ギャラリー内で完結するのではなく、壁画らしく街への展開や応答について具体的なアクションを期待したい。事前に提示したプランを従順に実現するのではなく、臨機応変に新たな展開をしてくれることを期待したい。」

武藤 勇氏（N-mark 代表）

「黒田さんのプランは、完成度が高いと感じた。滞在制作によって、何か新たな展開への契機を掴んでもらえたらと思う。」

川田さんのプランは、とても意欲的で保存の問題への関心も興味深い。ただボリュームがかなりあるので、現場で柔軟に制作する必要があるだろう。

応募全体に関しては、今回のテーマに対するアプローチの仕方、企画書の言葉の使い方が弱いひが多かったのが残念。県内の作家は長者町をもっとリサーチできたはずだし、こういう機会を活用する作家がもっと出てくるとよかった。」

滝 一之氏（滝一株式会社代表取締役）

「黒田さんのプランは、将来のまちの在り方に示唆をもらえそうな予感がした。

川田さんのプランは、テーマの **synergism** からは遠いように感じたし、まちのひとがこの作品を理解するには温度差が出るかもしれない。しかし「作品として残したい」ということに、今の長者町がまちとしてどう関われるのか、ぜひいろんな場を設けて、一緒に議論したいという点で評価した。」

武藤 隆氏（長者町アートアニュアル副会長）

「黒田さんのプランは、まちづくりに迎合するのではなく、アートとまちの歴史をつなげる意識に好感が持てる。この力量ならば、ノープランで長者町に来てもらい、ディスカッションやリサーチをしたうえで、制作してもらおうというのもおもしろいのではないか。

川田さんのプランは、再開発などで作品がなくなる可能性があることに対しても実験的な提案であり、アートラボあいちだけでなく、あいちトリエンナーレの作品群を残す、残さないということの問題提起にも捉えられる。制作・展示・保管に関しての問題意識が高いことも感じられ、2019以降の長者町を考えていくうえでも、ぜひ見てみたい。」